

〈解答〉

- ① 1 I ここに押ししてくれよ II イ
2 したがう
3 もやう
4 (1) エ (2) 「例」臨機応変に対処すること (11字)

配点 ① 1 I、2は各1点、他は各2点 10点満点

〈解説〉

① 「仮名世説」は、江戸時代の文人、大田南畝によって書かれた随筆集で、古代中国の著名人の逸話集である「世話世説」にならって、日本の優れた人物について紹介している。

1 印の押所について尋ねられた絵の達人は、「その絵が出来れば、ここに押ししてくれよと絵のかたから待つものなり(Ⅱその絵が出来上がると、ここに押ししてくれよ、と絵の方から(印を押すのを)待つものである)」と答えている。印を押す場所は、絵が完成すれば自然と決まるといふことである。

2 古文に出てくる語頭や助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に直す。よって、「したがふ」は「したがう」と直すことができる。

3 筆者は、座敷の上中下の座や人のあいさつは、その時々々の状況に合わせて決まると述べている。そしてその時の状況が読めない人に、そのことを納得させるのは難しいとも述べていることから、空欄には「状況」を意味する「もやう」が入るとわかる。

4 (1) 座敷の上中下の座や人のあいさつは、状況によって変わり、その時のなりゆきや状態に応じるものだと言っている。筆者は述べている。「一定の相」とは、エ「決まった方式」のことである。

(2) 筆者はこの話を通じて、何事にも決まった方式などはないので、状況を見ながら「臨機応変に対処すること」が大切であると伝えているのである。

〔現代語訳〕

ある時友人が来て世間話のついでに印を押す場所について尋ねたので、答えて言う。「印の押し所は決まっているものではない。その絵が出来上がると、ここに押ししてくれよ、と絵の方から(印を押すのを)待つものである」と言った。ある人がこの話を聞いて、「すべてのことはこれ(絵が出来上がると自然と印を押す所がきまること)と同じで、たとえばいろいろな座敷もそこに居合わせた客により上中下の座が決まり、また人のあいさつもその時々々の状況に合わせてなされる。臨機応変とも、その時のなりゆきや状態に応じるとも言うように、決まった方式や形式はないもの(である)。しかしその時の状況がわからない人に、この辺のことを納得させることは難しい。たとえ(状況を)よくわかつている人がその場をよくわかつていて、(わからない人に)融通をきかせたとしても」と言った。